

ベルクソンとアリストテレスの間隙

—*Quid Aristoteles De Loco Senserit*をめぐって—

松浦 和也

1. はじめに

ベルクソンの博士学位副論文である *Quid Aristoteles De Loco Senserit* (以下『場所論』、引用の略称は ALS) は、アリストテレス『自然学』第4巻第1～5章における場所 (τόπος) の考察を研究対象とした論文である。この『場所論』のアリストテレス解釈にはエドシックや当津らが高い評価を与えてきたが、彼らの『場所論』の扱いは、『意識に直接与えられたものについての試論』との結節点を模索し、ベルクソンの思想的発展を基礎づける資料とするものであった¹。だが、『場所論』で展開される解釈を『自然学』のテキストと突き合わせ、『場所論』がどの程度アリストテレス解釈として妥当性を持つかを評価する試みは奇妙にもあまり行われてこなかったように思われる。だが、『場所論』を『自然学』と対比させ、その価値や特色を古典研究の立場からも一度診断しておくことは、ベルクソンがアリストテレスから受けた影響をより緻密に測定する基盤となり、ひいては彼の思想的発展の全体像を豊満に描写することに寄与するだろう。

そこで、本論は、ベルクソン研究の立場からは注目されがちな『場所論』第7章から第9章ではなく、ベルクソンが『自然学』解釈に取り組む『場所論』第1章から第6章にまずは焦点を当てる。ここからは、彼が『自然学』のテキストを、議論構造を組み替えて解釈していることが確認されるだろう。次に、その組み替えの妥当性を『自然学』のそもそもの議論展開と『場所論』第7章から第9章におけるベルクソンの記述に立ち返りつつ、古典研究の立場から検証する。この際の鍵となるのが、「間隙」の理解である。以上の検証から、最後にベルクソンのアリストテレス解釈の独自性を示したい。

2. 『場所論』の方法、構造、特色

ベルクソンの『場所論』は全9章で構成されるが、第1章から第6章まではア

リストテレス『自然学』のテキスト分析に費やされる。第7章は『自然学』の場所論が孕む難問が提示される。第一に、場所の定義である「包むものの変化しない第一の限界」²が要求する場所の不動性と、天界（οὐρανός）の恒常的運動の間に想定される齟齬、第二に、場所の不動性と火・空気・水・土の四元素の自然運動の間に想定される齟齬、第三に、包むものと包まれるものの分離性の確保の方法である。以上の難問に対し、第8章はアリストテレスの『天体論』や『気象論』などを参照しながら、天界の円運動に着目することで解決を模索する。そして、第9章は、アリストテレスが空間ではなく場所を論じた理由を模索する。

さて、筆者の見たところ、『場所論』第1章から第6章の記述スタイルには次の特徴が挙げられる。第一の特徴は先行研究の扱いに関わる。昨今の古典研究では先行研究を引用し、批判的に検討することは基本と言ってよい作法であるが、この作法にベルクソンもある程度即している。ただし、彼は批判検討を本文中で行うことはなく、序文に付した脚注でブランディスやラヴェッソンらに対して、第6章に付した脚注でヴォルテルに対して、合計2回行うのみである³。これらの脚注は、彼のアリストテレス解釈の独自性と学術的価値を訴える。だが、これらの脚注で行われた先行研究批判が本文におけるアリストテレス解釈に直接影響を与えているようには感じられない。

第二の特徴も先行研究の扱いに関わる。われわれは対象とするテキストに解釈を与える助けとするために、先行研究の解釈をしばしば引用する。もちろん、ベルクソンも先行研究を利用するものの、彼が本文中で参照するのはラヴェッソンなどの同時期の先行研究ではなく、シンプリキオスとフィロポノスである⁴。このように古註をベルクソンが重視した動機は『自然学』のテキストで展開される議論の難解さにあるだろう⁵。ただし、ベルクソンは古註の解釈としての妥当性を検討してはいない。

第三の特徴はその咀嚼の仕方に関わる。昨今の研究ではアリストテレスの議論展開を咀嚼するために、テキストに書かれたひとまとまりの議論を一度ひとつひとつの論点に解体し、それらの論点を論理的に再構成することがある。この手法に対し、ベルクソンは『自然学』の論点を論理的に解体するよりも、パラフレーズすることで理解しようとする。この特徴は、むしろ古註の記述に近いように感じられる。

しかしながら、『場所論』には古註とは異なる趣を持った箇所があり、そこにみられる解釈方法が第四の特徴である。一般的に、古典テキストに対する注釈のスタイルは、対象テキストの議論をできるだけ順序通りに、変更せずに解釈を記

述することに特徴のひとつがある。たしかに、ベルクソンの『場所論』第1章から第6章は概ね『自然学』の進行に即している。ただし、第5章は例外である。

『場所論』第4章は『自然学』第4巻第2章 209a2-30 および第4章 211b5-212a30 に対応し、第6章は『自然学』第4巻第4章 212a2-14 から第5章 212b22 までに対応する。しかし、『場所論』第5章は『自然学』の場所論を飛び越え、『自然学』第4巻第6～9章に対応する。しかも、この『自然学』第4巻第6～9章でアリストテレスが考察する対象は場所ではなく、空虚 (*κένον*) である。つまり、ベルクソンはアリストテレスの場所論を解釈するために、『自然学』の議論順序を組み換え、空虚論を挿入して読解しているのである。

筆者が確認した限り、このような戦略でアリストテレスの場所論を解釈する試みは珍しい。それゆえ、『自然学』の議論構造の組み替えは『場所論』におけるベルクソンのアリストテレス解釈の特徴のひとつであろう。

3. 『自然学』の場所論と空虚論

次に検討すべきは、この『自然学』の議論構造の組み替えが、アリストテレス解釈としてどの程度妥当か、ということである。

まず、場所論と空虚論の関係の点から検討しよう。両者の関係にベルクソンが言及する発言は以下の箇所が挙がる。

アリストテレスがこの問題 [場所の本性とは何か] を考察するときにはいかなる順序を守ったのか、このことを明らかにするのは難しい。なぜなら、彼はより容易に理解されるように、まず場所について、次に空虚について別々に論じているが、両者の問題が相互に浸透するように見えるように彼は呈示しているからである。(ALS, III 14)

空虚についてアリストテレスは場所の論述を終えるまで論じなかったが、それにも関わらず彼が空虚の問題と場所の問題を緊密な縄で結んでいたことは、次の文の冒頭から明らかである。(ALS, V 21)

上の2つの引用は、アリストテレスの場所論と空虚論が密接に関与するものとベルクソンが解していることを示す。これに加えて、前者の引用は場所論と空虚論とが相補的關係にあるという理解を提示しているが、この理解については次節で

検討する。

さて、後者の引用の記述に続き、ベルクソンがラテン語で翻訳引用する『自然学』のテキストは、第4巻第6章の冒頭である。

同じ方法で自然学者は空虚についても考察すると考えるべきである。場所の場合のように、空虚は存在するか否か、空虚はどのように存在するのか、そして空虚は何であるか、を。(Phys. IV 6, 213a12-14)

たしかに、この箇所には先行する『自然学』第4巻第1～5章の場所論に対する言及がみられる。それゆえ、アリストテレスが空虚の問題と場所の問題を密接に結んでいたとするベルクソンの理解は正しい。

次に問うべきは、この事実が『自然学』の議論構造の組み替えを許すほどの説得力を持つか否かである。筆者としては、この事実のみによってはその妥当性を確保できないと思われる。2つの理由を挙げよう。

第一の理由は、『自然学』第3、4巻においてアリストテレスが冒頭で先行する議論に言及することは『自然学』の空虚論に限らないからである。ここで『自然学』第4巻第1章における場所論の冒頭を確認しよう。

自然学者は無限と同様に、場所についても知らなくてはならない。場所は存在するか否か、場所はどのように存在するのか、場所は何であるのか、を。(Phys. IV 1, 208a27-29)

アリストテレスは場所の考察を始める前に、先行する『自然学』第3巻第4～8章で展開された無限論に言及する。先行する考察への言及は『自然学』第4巻第10章以降の時間論でも同様に見出される⁶。つまり、アリストテレスの場所論と空虚論のつながりは、場所の問題と空虚の問題に特有のものではない。そして、両者のつながりが特有ではない限り、場所論と空虚論の議論構造の組み替えは不適切な読解方針だと思われる。

第二の理由は、まさにテキストがそのように読まれることを期待していないからである。『自然学』の無限論、場所論、空虚論、時間論の議論展開は、基本的に『分析論後書』第2巻第1章で述べられる探究の手続きに即している⁷。すなわち、「事実かどうか」、「なぜそうか」、「あるか」(換言すれば「存在するか」)、「何であるか」の4つの問いがあるが、「あるか」と「何であるか」の間には次の手順

に従わねばならない。まず考察対象が存在するかを問い、考察対象が存在することが確定してから、考察対象が「何か」を探求する、という手順である⁸。そして、事実、『自然学』第4巻の場所論と空虚論は、場所の存在の確定、場所の定義の探究、場所の定義の確定、空虚の存在の否定という順序で進行する。

他方、ベルクソンの読解方針を採用したとき、アリストテレスは場所の存在の確定、場所の定義の探究、空虚の存在の否定、場所の定義の確定という『分析論後書』に反した入り組んだ手順を展開したことになる。だが、『自然学』の議論展開においても、場所論と空虚論の冒頭部においても、アリストテレスは、場所に対する「存在するか」「何であるか」の問いと、空虚に対する「存在するか」「何であるか」の問いを混同していない。これらの問いは別々の問いである。それゆえ、『自然学』の場所論に空虚論を挿入して解釈することは、筆者にとっては躊躇われる解釈方法である。

4. 『自然学』第4巻第4章 211b14-25の「間隙」

しかし、ベルクソンが『場所論』で採用した組み換えはわれわれも誘惑する。その理由は、アリストテレスが場所の定義を探究する議論の中に難解な一節を残したことによる。

『自然学』第4巻第4章において場所の定義を探究する途上で、アリストテレスは定義の候補を4つ挙げる。形相、質料、端の中間にある「間隙」(διάστημα)、そして両者の端である(Phys. VI 4, 211b6-9)。ここから彼は1番目から3番目の選択肢を否定し、4番目の選択肢を採用することで、場所の定義として「包む物体の限界」(Phys. IV 4, 212a6)あるいは「包むものの、変化しない第一の限界」(Phys. IV 4, 212a20)を導く。

このような『自然学』のテキストとベルクソンの『場所論』を照らし合わせたとき、彼が『自然学』の議論展開を組み替えた理由が明らかになる。『場所論』第4章に対応する『自然学』第4巻第2章 209a2-30 および第4巻第4章 211b5-212a30 は、アリストテレスが場所の定義の1番目と2番目の選択肢を検討する箇所である。一方、場所の定義の3番目の選択肢を検討するのは『自然学』においては第4巻第4章 211b14-25 であるが、この箇所をベルクソンは取り上げず、代わりにパラフレーズされるのが、『自然学』第4巻第6～9章の空虚論である。つまり、ベルクソンによる組み換えの妥当性の有無は、『自然学』の第4巻第4章 211b14-25 と『自然学』第4巻第6～9章の関係に依拠する。

ただし、『自然学』第4巻第4章 211b14-25 は極めて難解なテキストである。以下に（直訳的な）翻訳を記そう。

壺から水が移動する時のように、包むものは静止しているにも関わらず、包まれて分離するものはしばしば移動する（μεταβάλλω）ゆえに、中間の何らかの「間隙」が、移動しうる（μεθιστάμενον）物体から離れた何ものかであるかのように、[場所] だと思われる⁹。だが、それはそうではない。むしろ、移動できかつ接触する本性を持つ何らかの物体が入る。もし、ある「間隙」がある本性的に同じところに存在し留まるならば¹⁰、無限の場所が存在することになる。なぜなら、水と空気が位置を変えたとき、両者のあらゆる部分は全体の中で、水全体が容器の中で行うことと同じことを行うからである。同時に、場所は移動しうるものになるだろう。それゆえ、異なる場所の場所があることになり、また、多くの場所が同時に存在することになる。

諸論点の文献学的再構成は、本論では省く。ただし、次の3点は確認しておきたい。第一に、この箇所ではアリストテレスは「間隙」を空虚と言い換えていない。第二に、この 211b14-25 が提起する不条理は、無限の場所が生じることと、場所が移動することの2点である。第三に、これらの不条理をアリストテレスは場所が「間隙」であったと仮定した場合に導いている¹¹。

さて、ベルクソンは『場所論』で上の引用部分の代わりに空虚論を代替として読解する。この代替が許される必要条件是「端の中間にある『間隙』」が「空虚」と同一の対象を指示することだろう。では、上の引用中の「間隙」は「空虚」を指示するか。

内容的にまず確認すべきは「端の中間にある『間隙』」の「端」とはより具体的には何と何の「端」であるかである。この点に関しては2通りの理解がある。第一の候補は、包む物体と包まれる物体の「端」であり¹²、第二の候補は包む物体内部の両端である¹³。前者の場合、「間隙」とは、例えば壺と水の間が存在する延長を指示し、後者の場合、「間隙」とは、例えば壺の中身の「かさ」を指示することになるだろう。

ところで、アリストテレスが場所の定義の候補として挙げる形相や質料とは、物体の形相や質料、すなわち場所に包まれ、移動を行う物体の形相や質料であろう。つまり、壺に入った水を例に採れば、水の形相や水の質料を指示する。

ただし、『自然学』第4巻第4章 211b9 の「そのうちに入る物体の大きさから

離れた『間隙』」や同章 212a3-4 の「移動する事物とは常に異なる『間隙』」という表現は、「間隙」は移動を行い、場所に包まれる物体から独立した対象であることを暗示する。また、仮に「間隙」が場所に包まれる物体に依拠する対象であれば、形相や質料は場所に包まれる物体から独立した存在ではないから場所の定義ではないと判断する第2章 209a2-30 および第4巻第4章 211b5-212a30 と同様の議論をアリストテレスは「間隙」にも適用したのであろう。それゆえ、「端の中間」の「端」は包む物体の「端」を指示し、「間隙」は具体的には壺の中身の「かさ」を指示すると解すべきである。

そして、このような「間隙」の理解をベルクソンも採用していたように思われる。まず、『場所論』第3章末尾を確認しよう。

これから次のことをひとつひとつ明らかにしていこう。なぜ、場所は物体ではないのか。なぜ、[場所は] 包まれた物体のある性質ではないのか。さらに、なぜ、[場所は] 物体を取り除いた後に残っている空虚な「間隙」(intervallum) ではないと思われるのか。(ALS. III 15)

次に、『場所論』第5章冒頭の発言を確認しよう。

さて、一方で、場所に関わらないと考えられる包まれた物体を取り除いた場合、もし空虚な「間隙」が残るならば、それがまさに場所であることは正しい。(ALS. V 21)

ここでもベルクソンは物体が取り除かれた後の「間隙」に着目している。これら2つの引用において「空虚な『間隙』」という表現が現れた。この表現中の「間隙」は壺と水の間に想像される「間隙」ではないだろう。むしろ、水とは独立して存在するが、水と同じところに共存しうるような「間隙」だろう。このように、ベルクソンは「間隙」を包む物体と包まれる物体の間にあるものとは見なさず、包む物体の「かさ」と見なしている。

ただし、ここで留意せねばならないことは、ベルクソンは「間隙」に「空虚な」(vacuus) を付しているが、アリストテレスは「空虚な」(κένος) を付していないことである。言い換えれば、アリストテレスは「間隙」が物体性を欠くとは述べていない。むしろ、『自然学』第4巻第4章 211b14-25 の着眼点は、ある物体が移動した後に他の物体が入り込んだ「間隙」にあると思われる。壺と水の例に

即せば、水が出て行った後の「間隙」には空気が入るが、その別の物体が入り込んだ「間隙」は元の物体の場所ではない、というのがその議論の流れであろう。

つまり、アリストテレスにとって「間隙」とは移動する物体と区別すべき「かさ」であるが、別の物体を伴った「間隙」だと解すべきである¹⁴。

『自然学』における「間隙」に関する以上の理解は、『自然学』第4巻第6章における空虚論中の次の発言からも補強できる。

ある人々は内部に感覺的物体がない「間隙」を空虚と呼ぼうとする。

οἱ δ' ἄνθρωποι βούλονται κενὸν εἶναι διάστημα ἐν ᾧ μηδὲν ἐστι σῶμα αἰσθητόν.
(*Phys.* VI 6. 213a27-29)

上の引用はアナクサゴラスの空虚論駁における想定をアリストテレスが分析した箇所である。そして、次の引用は、空虚の意味をアリストテレスが分析し、点は空虚とは同一視されないと主張する箇所である。

点が空虚であるとすれば、奇妙である。なぜなら、[空虚は]内部に可觸的物体の「間隙」がある場所だからである。

ἄτοπον δὲ εἰ ἡ στιγμή κενόν· δεῖ γὰρ τόπον εἶναι, ἐν ᾧ σώματός ἐστι διάστημα ἄτπου.
(*Phys.* VI 7. 214a4-6)

両方の引用で着目すべきは、アリストテレスが空虚を「間隙」と同一視していないことである。たしかに、空虚に関する彼の分析は、内部に感覺的物体がない「間隙」、あるいは内部に可觸的物体の「間隙」がある場所、というものである。だが、この分析は、彼にとって「間隙」の語はそれだけでは空虚を指示しないことを含意する。むしろ、内部にいかなる物体も存在しないという制限を加えて、はじめて「間隙」は空虚を指示しうるのである。

それゆえ、「端の中間にある『間隙』」は、それだけでは「空虚」を指示しない。それにも関わらず、『自然学』第4巻第4章 211b14-25 を飛ばして、『自然学』第4巻第6～9章を代替とするには、本来であればこの 211b14-25 の解釈を通じて読解の正当性を立証すべきであるように思われる。

しかし、この 211b14-25 にベルクソンは『場所論』で言及しない。それゆえ、彼が自身の読解をどのように正当化するかは不明である。ただし、『自然学』の「端の中間にある『間隙』」を「空虚な『間隙』」と同一視することは彼の解釈

の前提であり、場所の定義が「間隙」ではないことを証明するには空虚の存在を否定する必要があると彼が解していることは事実であろう¹⁵。それゆえ、ベルクソンは、アリストテレスは空虚の非存在を主張することによって場所の定義が「間隙」ではないことを証明しようとしたが、空虚の非存在はいまだ完全に証明されていないので 211b14-25 は不十分な議論だ、と診断したのであろう。

5. 『場所論』のアリストテレス解釈の出発点

『自然学』解釈における議論展開組み換えの分岐点は、物体をある場所から取り除くという現象をいかなるモデルで理解するかという点にあると思われる。少なくとも問題の 211b14-25 において、アリストテレスは容器から水を取り除いた後、水の場所には空気が入ると考えているように見える。また、水、空気、容器といった具体的な物体を導入している点から考えると、アリストテレスは物体が入り込んだ「間隙」を想定した上で、場所が無限に生じる等の不条理を導出したように感じられる。

他方、ベルクソンはこの空虚な「間隙」を空虚な「空間」(spatium)とも呼ぶ¹⁶。第5章の副題を確認しよう。

アリストテレスはどのような理由で場所は空虚(inanis)な「間隙」ではなく、空虚な空間は決して理解されないと判断したか。(ALS.V 21)

また、ベルクソンは『場所論』第5章で、アリストテレスの言う空虚をしばしば「空虚な空間」と表現する¹⁷。「空虚な空間」あるいは「何もない空間」等のように、空間の概念に訴えかけることで読者に『自然学』における空虚の概念の理解を読者に促す解説は昨今でも頻繁に見られる¹⁸。

ただし、他の解説や解釈よりもベルクソンが特徴的であるのは、空間の概念をアリストテレス解釈において強調することである。たとえば、『場所論』序文でベルクソンは、アリストテレスが場所を空間の代用とし、空間の問題を避けたと述べる¹⁹。さらに、結論部である第9章の副題には次のような文言も見られる。

多くの人々が空間について論じたにも関わらず、アリストテレスは場所を論じたのはなぜか。(ALS.IX 72)

このように『場所論』でベルクソンが自身に課した課題は、アリストテレスが空間を論じず、場所を論じた理由の探求である²⁰。

もっとも、アリストテレスが空間を論じなかった理由は、彼が空間の概念を持っていなかったからだ、という返答も考えられる。しかしながら、この返答をベルクソンは選択肢に数えていないように思われる。

アリストテレスは現在の多くのわれわれ哲学者たちと同様に、空間はある包むものであり、あらゆる物体はその内部で位置を与えられ、運動すると考える。(ALS. IX 72)

ベルクソンの解釈では、彼と同時代の哲学者もアリストテレスも空間に関する根本的な理解を共有している。それゆえ、アリストテレスは空間の概念に無知であるはずがない、というのがベルクソンの『自然学』解釈の前提である。

そして、この前提が真である論拠としてベルクソンは古代原子論に言及する。

しかし、空虚でありかつ無限な空間のデモクリトスの教説に「アリストテレスは」無知ではなかった。(ALS. 78)

デモクリトスの古代原子論とアリストテレスの空間の存在に関する信念がどのように結びつくのかは引用から明瞭ではないが、おそらく次のように想定されているのだろう。古代原子論の言う「空虚」とはその内部に何もない空間を指示する。そして、アリストテレスは古代原子論を紹介し、批判している。何もない空間の存在を考察している以上、彼は空間の概念を会得していたはずである。

しかしながら、そもそも空虚を意味するギリシア語 τὸ κενόν は字義的には「空っぽさ」を意味する形容詞 κενός の中性単数形に由来する。それゆえ、この語は「空っぽさ」または「空っぽのもの」を意味し、必ずしも「空間」を含意しない。さらに、セドレーが指摘するように、当初 τὸ κενόν は否定的な実体を意味し、「空っぽの場所」もしくは「空っぽの空間」を意味するようになったのは紀元前3世紀以降にかけてであるならば、古代原子論において空虚が何もない空間を含意するかは検討の余地がある²¹。

また、古代原子論における「空虚」をアリストテレスが何もない空間だと理解していたかどうかは検討の余地がある。もちろん、『自然学』第4巻第8章で彼が論駁する空虚とは、空虚の中で物体が運動するというモデルの下で理解された

空虚である。この場合、空虚を何もない空間と解することに違和感はないだろう。だが、『自然学』第4巻第9章で論駁する空虚は物体に内在する空虚である。このような空虚を何もない空間だと即断することは難しい。なぜなら、物体が移動すると、その物体の空間も移動することになるからである。むしろ、この場合の空虚は、物体を構成する元素のひとつとして理解すべきである。この理解は、『形而上学』第1巻第5章 985b4 以下でレウキッポスとデモクリトスの説を紹介するとき、アリストテレスが「充実体」(τὸ πλήρες)と「空虚」を元素(στοικεῖα)と記していることと一致する。

アリストテレスはそもそも空間の概念を有していたか。この問いは慎重に考察すべき課題だが、筆者が彼の著作を見渡す限り、肯定的な論拠は少ない。なぜなら、空間に直接翻訳可能なギリシア語も、空間と確実に同一視できる概念も、アリストテレスの著作に見られないからである。そもそも、彼は空間の存在を否定する可能性すらある。彼は『自然学』第4巻第8章 216a26-b16 で空虚の存在を否定する論拠を提示する。その論拠の背景にある前提は(筆者の解釈であるが)、同じところに2つ以上の実体は存在しないというものである。この前提を空間に転用すれば、物体が持つ延長と空間が持つ(べき)延長は重なり合って存在することはない。それゆえ、物体と同じところに共存しうるような空間の存在を彼は認めないだろう²²。

このように、アリストテレスが『自然学』における場所や空虚の考察において空間の概念を有していたかどうかは、必ずしも自明ではない。逆に言えば、空間の存在をアリストテレスは自覚していた、という確信がベルクソンの『自然学』解釈の根本に存する独自性であるように思われる。そして、この確信を真と認めることが、「間隙」を空間とし、「空虚」を「何もない空間」とみなし、さらに『自然学』第4巻の記述順序を組み替えることが許されるために必要な条件のひとつでもあるだろう。

6. 哲学と古典的テキスト

ベルクソンはアリストテレスの場所概念を評し、場所は物体より前に存在するものではなく、物体あるいは物体の秩序と配置から生じると分析する²³。この分析は鋭い指摘である。『自然学』の場所論においてアリストテレスの四元素説は既知のものとされており、この四元素説は、物体の自然的運動を説明するのみならず、宇宙の秩序と配置を説明する。また、アリストテレスは場所と物体を存在

論的に対等に扱っていない。むしろ、彼の考察の出発点は、目の前に運動する物体が存在するという事態であるように思われる。事実、物体が存在し、物体が運動するという事態の真偽を彼が『自然学』で積極的に問題視することはない。

ただし、なぜアリストテレスは空間ではなく、場所をもちだしたのか。ベルクソンが発した問いに対しては、もしかするとアリストテレスの頭中には空間の概念が存在しなかった、と返答する可能性が残される。

このような返答は、哲学研究の対象としてのアリストテレスの魅力に泥を塗ることに等しいかもしれない。だが、アリストテレスは空間の概念を持たないという返答が仮に正しいとしたならば、哲学的古典テキストを読むというわれわれの営為のひとつの警告を与えるように思われる。『場所論』のベルクソンはアリストテレスにある種の空間論を期待して『自然学』解釈に取り組んだ。だが、実は彼らの間には世界理解のスキームにおいて根本的な間隙が存在したことになる。このような間隙は、アリストテレスとベルクソンの間に限らず、哲学的テキストの執筆者と読者の間に無自覚的に横たわりうるだろう。

このような目に見えぬ間隙に読者たるわれわれはどのように対処すべきか。この倫理的問いに答えることは本論の限界をはるかに超える。しかしながら、古典研究にはテキストとわれわれの間にある見えない間隙に色づけする役割があり、その間隙を踏み越え、時代時代の問題意識からそのテキストを読み、テキストに内在する豊富なアイディアを発見し、新たな知見を生み出していくのも哲学的な営為であると筆者には思われる。

※本研究は JSPS 科研費 22320003、24820007 の助成を受けたものです。

¹ Heidsieck 1957, 29-39. 当津 1961, 255-71. 荒木 1995, 34-44. 三宅 2012, 34-44.

² τὸ τοῦ περιέχοντος πέρασ ἀκίνητον πρῶτον, τοῦτ' ἔστιν ὁ τόπος (*Phys.* IV 4, 212a20-21)

³ *ALS*, I 1-2. VI 58-60.

⁴ シンプリキオスに対する言及は *ALS*, II 9, 11, 12, 19, 60, 66. フィロポノスからの引用は *ALS*, II 9, 11, 12, 19. また、シンプリキオスの『自然学註解』を通じ、現在では失われたアフロディシアスのアレクサンドロスの『自然学註解』への言及が、*ALS*, VI 19 に見られる。

⁵ ベルクソンはしばしばアリストテレスの議論を不明瞭と評する。*ALS*, I 1. 19. V 28. VI 41.

⁶ 「これまで述べてきたことの次に時間について論じよう。そのための良い方法は、はじめに外部の言説を通して時間についての難点を提示することである。つまり、時間は存在するものに属するのか存在しないものに属するのか、次にその本性は何であるのか。」 (*Phys.* IV 10, 217b29-32)

⁷ バーンズは『分析論後書』の引用箇所を参照として『自然学』第3、4章の無限論冒頭を挙げている。この参照は、さらに場所論（および空虚論と時間論）冒頭にも拡張しうる (Barns 1975, 195. Simplicius 1882, 520)。

⁸ *An. Post.* II 1, 89b23-35

⁹ 211b16-17 に τόπον を補う。

¹⁰ 211b19-20 のテキストは校訂者による差が大きい。ベッカーは、εἰ δ' ἦν τι τὸ διάστημα τὸ πεφυκὸς καὶ μένον ἐν τῷ αὐτῷ τόπῳ, ... と読む。ロス は、ベッカー校訂が期待するような τὸ πεφυκὸς を τὸ φύσει ὄν と同一視する解釈を拒絶し、カンマを ἐν τῷ αὐτῷ τόπῳ の後ではなく、前に打ち、εἰ δ' ἦν τι [τὸ] διάστημα <καθ' αὐτὸ> τὸ πεφυκὸς <εἶναι> καὶ μένον, ἐν τῷ αὐτῷ τόπῳ... と読む。カルテロンはロスと同様に καθ' αὐτὸ πεφυκὸς εἶναι と挿入するものの、εἰ δ' ἦν τι διάστημα καθ' αὐτὸ πεφυκὸς εἶναι καὶ μένειν ἐν ἑαυτῷ, ... と読む。また、ウィックステードは εἰ δ' ἦν τι [τὸ] διάστημα τὸ πεφυκὸς καὶ μένον ἐν τῷ αὐτῷ [τόπῳ], ... と読む。Ross 1936, 572.

¹¹ 従って、『自然学』第4巻第4章 211b14-25 は次のような背理法的形式で行われていると解すべきである。「間隙」が場所だと仮定する。だが、「間隙」は場所に要求される諸条件を満たさないばかりか、場所の無限後退を引き起こす。それゆえ、「間隙」は場所ではない。

¹² 出 1968, 135.

¹³ Simplicius 1882, 571. Ross 1936, 375.

¹⁴ Morison 2002, 121.

¹⁵ ALS, V 22.

¹⁶ このような言い換えは、ALS, V 23, 24, 25, 27 に見られる。

¹⁷ ALS, V 25, 26, 27, IX 74.

¹⁸ Robin 1992, 142. Sorabji 1983, 76. Solmsen 1960, 136. etc.

¹⁹ ALS, I 1.

²⁰ cf. ALS, XI 75. 79.

²¹ Sedley 1982, 180.

²² 松浦 2011, 60-3.

²³ ALS, XI 76.

[参考文献]

荒木秀夫. 1995. 「時間・空間・場所—ベルクソンの『アリストテレスの場所論』をめぐる—」, 『同志社哲学年報』, 同志社大学文学部哲学研究室, 18号, 34-49.

Barnes, Jonathan. 1975. *Aristotle's Posterior Analytics, translated with notes*, Clarendon Press.

Bergson, Henri. 1889. *Quid Aristoteles de Loco Senserit*, Alcan. (ALS)

Hussey, Edward. (1st published. 1983) 1993. *Aristotle Physics Books III and IV, Translated with Introduction and Notes (New impression with correction and additions)*, Clarendon Press.

Heidsieck, François. 1957. *Henri Bergson et la notion d'espace*. Le Cercle du Livre.

出隆. 1968. 『アリストテレス全集3』, 岩波書店.

磯部悠紀子. 2007. 「ベルクソン哲学の「場所」論—『アリストテレスの場所論』を基点として—」, 『聖心女子大学大学院論集』, 聖心女子大学, 29号 (2), 43-62 (107-126).

松浦和也. 2011. 「アリストテレス『自然学』第4巻第8章 216a26-b16」, *Studia Classica* 2, 西洋古典学研究会, 47-64.

三宅岳史. 2012. 『ベルクソン 哲学と科学との対話』, 京都大学出版会.

Morison, Benjamin. 2002. *On location: Aristotle's concept of place*, Oxford University Press.

Robin, Léon. 1994. *Aristote*, Presses universitaires de France.

Ross, William D. 1936. *Aristotle Physics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, Oxford University Press.

Sedley, David N. 1982. "Two Conceptions of Vacuum," *Phronesis* 27, Brill, 175-93.

Simplicius. 1882. *In Physicorum (In Commentaria in Aristotelem Graeca X)*, Diels, H. ed. Berlin.

Solmsen, Friedrich. 1960. *Aristotle's System of the Physical World: A Comparison with his Predecessors*, Cornell University Press.

Sorabji, Richard. 1983. *Time, Creation, and the Continuum: Theories in Antiquity and the Early Middle Ages*, University Of Chicago Press.

当津武彦. 1961. 「ベルグソンのアリストテレス解釈—空間と時間の問題をめぐって—」, 『ベルグソン研究』, 坂田徳男, 澤瀉久敬編, 勁草書房, 255-79.